

藤 樹 學 (上)

—その發展とその意義—

加 藤 仁 平

目 次

第一章 藤樹の修學	二十二歳まで
第二章 前期藤樹學(朱子學的藤樹學)	
第一節 林家の朱子學に對する純化運動	二十三、四歳
第二節 獨特の母子關係に基く孝道哲學の成立過程	九—廿五—廿八歳まで
第三節 大野了佐の教育	三十一歳
第四節 藤樹規及び學舎座右戒	三十二歳
第五節 朱子學圈内に於ける動搖	廿八—卅三歳まで
第三章 後期藤樹學(陽明學的藤樹學)	以下次號
第四章 結 論	

近世の日本思想史並に教育史二百數十年の間に於て、一六四二から一六五〇に至る小十年が、藤樹學的なるものゝ方向へその發展の尖光を輝かしたことは、何人も承

認し得るところであらう。然らば如何にして近世思想史並に教育史は藤樹特有の個性と環境とを通じて、藤樹學的なるものを生み出したか？こゝに承前起後の關係を辿つてその展開の姿を眺めんとするこの小篇は、引いては藤樹學の思想史的並に教育史的意義を把握する所以ともなり、藤樹を通じて觀たる近世思想史並に近世教育史の一考察ともなるであらう。

第一章 藤樹の修學

二十二歳までの藤樹は、近世思想史並に近世教育史の影響の中に成育しつゝあつたといふだけで、自ら進んでその尖端に立つといふやうな歴史的意義をもつてはゐないが、歴史的な藤樹學の發生する地盤としては、看過することの出来ないものがある。故に第一章として藤樹の修學期を考へる。

我が中江藤樹は江西高島郡小川村の人、諱某、字は吉次を父とし、同郡北川氏の女を母として、慶長十三年戊申三月七日、小川村藤樹の下に生れた。祖父諱は吉長、加藤侯に祿仕した。藤樹に對する遺傳や教育を考ふべき資料は、祖父に於て若干を残してゐるが、父母に就いては不幸にして、より僅少なるものをしか與へられてをらぬ。

元和元年八歳の頃、小川村の僻壤に生長すと雖も、野鄙の習に染む事なく、たま〜

隣家の兒童と馴れ遊ぶときも、毎に靜かにして彼に移る事なく(岡田氏本年譜)、「邦君或過其門、則雖在內庭室中、必跪拜致其敬」(會津本年譜)したといふ。その自主的にして慎獨的なる性格を見るべく、心學的藤樹學の成立と、近江聖人としての人格とが、こゝにその萌芽を示したのを注意すべきである。

九歳の春、祖父小川村に來つて藤樹を養はんと欲し、固く父母に強ひて遂に伯州に携へ歸つた。藤樹性穎敏、豪邁にして幼より物に愛着せず、故に父母を離れて遠行するも一毫も哀むことなく能く祖父母に孝事した。後年一學派の開祖たるべき彼が本來の強さを知ることが出来る。かくて今年始めて文字を習ひ書し、期年にして殆ど能くした。祖父もと文字に拙く、毎に之を後悔してゐたので、藤樹をして努めて文字を學ばしめ、遠近の書翰も皆之を書せしめた。人皆其の幼にして文字を能くすることを驚歎した(岡田氏本年譜による。川田、會津兩年譜も大同小異)といふ。この天分とこの境遇と、祖父の教育的態度とが注意せらるべきだ。

翌年伯州米子の太守左近公加藤貞泰が豫州大洲へ轉任したので祖父に従つて大洲に往き、冬吉長の風早郡の宰たるに及んで、又従つて風早に移つた。祖父爲めに師を求めて一年譜には師を求めてとあるが、他に徵證はない。或は獨學かも知れない。益

々文字を勵み習はしめた。字を學ぶの間に於て庭訓式目等を學び記得すること甚だ速かにして、一字として忘るゝ事なく、祖父悦んで壯年の人と雖も及ぶべからずとなして、常に人に逢ふ毎に其の敏なることを稱譽したが、藤樹は「吾コレヲノミニ止ルベカラズ」として努力を怠らなかつた。(岡田、他の二本も大同小異)

八歳以來示した心學的な藤樹が大學を讀んで、その心學的なるものを把んだのも當然であらう。川田氏本年譜元和四年戊午、先生十一歳の條に曰く、

始讀大學、至自天子以至於庶人、壹是皆以脩身爲本、嘆曰、幸哉此經之存、聖人豈不可學而至焉乎、因泣下沾衣

と。彼の立志が修身爲本にあることは、心性の學としての第一歩を確乎として踏み出したものではないか。伊藤仁齋も亦大學を讀んで發憤興起したもので、共に近世的儒學の影響を物語つてをり、その年齢も亦同じ十一歳であるが、

甫十一歳、就師習句讀、初授大學、讀治國平天下章、謂今世亦有知如許事者邪

といふのであつて、治國平天下章をとつたところに兩者の學風の幾分の差を見るべく、心學者として内に深く掘り下げて行く藤樹の傾向がこゝにも既に示されてゐる。

(註)

註 岡田氏本年譜では十一歳の條には何等の記事も見えぬが、十七歳の條に、「嘗て大學ノ句讀ヲ習フニ正心脩身齊家等ノ語アルニヨツテ儒學ニ身ヲ脩メ家ヲ齊ル道アル事ヲ知ル、然レテ教フルモノナフメ默止ス」とある。

修身爲本の内省的な彼が生存に對して報本的となるのも同一の軌道である。十二歳の或る日、食する時に此の食は誰が恩であるかを反省して、一つには父母の恩、二つには祖父の恩、三つには君の恩、自今以後常にこの恩を思つて忘るべからざるを誓つた（岡田、川田氏本亦同じ）といふ。こゝに彼の報本的なることゝ反省的傾向の強いことゝを見ると共に、將來の彼が運命はこの三位一體觀にある程度の影響を及ぼしてゐる。祖父母に死別しても君に事へてゐたが、父を失ふや、母と君とが彼の心を等しく占領した。年經つて母の病むに及んで、終に君を棄てゝ母の膝下へ奔つた。こゝにも平和時代の武士の意義と、その獨特の立場に立つての藤樹の忠孝觀とが窺はれる。元和六年庚申十三歳にして、祖父に従つて奸人須トを討ち、更に賊徒の復讐に備へた。（岡田氏、川田氏兩年譜に詳述されてゐる、宮津本では十二歳の條に見える）實戰の體驗は彼の固有の膽勇を示すと共に、更に之を養ひ得たに相違ない。大阪陣がすんで僅に五年しか經つてゐない頃の事でもあり、祖父も藤樹も共に勇敢な氣象を遺憾なく現はしてゐる。斯くの如き文武兼修の地盤から藤樹の心學は生み出されたのである。彼の心學が町人

を對象とせる後世の石門心學と異なる點の一はこゝにも見出される。

十四歳の某日、大洲の家老大橋氏が諸士四五人を伴つて吉長の家に來り終夜對話した。(昨冬祖父に従つて風早郡より大洲に歸る)。家老大身なる人の物語は常人に異なる所があらうと考へて、壁を隔て、陰れ居て終夜之を聞くに何の取り用ふべき事もなく、終に心に疑つて之を怪しんだ。(岡田、他二本大同)會津本年譜には「先生賤之」と記してゐる。思ふに、十四歳迄修養し來つた藤樹の人生觀が當代の上級人士たる家老等に比してこれだけの隔たりのあつたことを示してゐる。茲に藤樹が彼等を賤むと共に、聖學的修養の必要を感じたに違ひない。彼と比較したところに我の當代に於ける意味を感じたに違ひない。自己の使命を知る自覺は、軽いながらも起つたであらう。自重心もこゝに芽生えたであらう。かくして彼の心學的意識は徐に高次に進みつゝあつた。翌十五歳の年譜には、平居僚友相應接の間一の過失あれば他を恥ぢ自ら悔ゆ、月を越ゆれども忘るゝ事能はず、其の羞惡の深きことかくの如く、一物の遺受も甚だ謹んだ(岡田、他二本も大同小異)と見えてゐる。

十四歳の條に「嘗テ寺ニ入テ手跡ヲ學ビ其暇ニ詩聯句ヲ學ブ。マ、佳作アリ」(岡田、岡田本異本ミ、川田本ミでは曹溪院天梁和尚に就いたさある)と見えてゐるが、古義堂や徂徠門に於けるが

如き文辭の重視は彼には一度も現はれなかつた。文運未だ開けざる當代に於て、而も終生を田舎に過したことは、文辭的、學術的、學術的方面に藤樹を伸すべく極めて不利であつたであらう。そこに却つて本來の心學的體驗生活は單純にその進路を早めたであらう。

同年秋八月七日、祖母を失ひ、翌元和八年秋八月二十二日には更に祖父吉長をも失ひ、連遭大喪、哀痛形於色（川田氏本年譜）はれた。

寛永元年、十七歳の夏、醫師の招によつて京都より禪師來つて論語を講じたが、當時大洲の風俗武を専らにし、文學を以て弱なりとしたから、士人の之を聞くものなく、唯藤樹獨り潛に往いて之を聞いた。然るに論語の上篇を講じ終つて禪師が歸京したので、又師とすべき者なきことを愁へて四書大全を求め、人の誹謗を憚つて晝は終日武を講じ、毎夜深更に及んで業として二十枚を見終つて寐ねた。其の通せざる所あれば思つて忘れず、夢寐の間人ありて示すが如くにして曉得する事多く、先づ大學大全を讀むこと殆ど百遍に及んで、始めて曉得した。大學通じて後語孟を讀むに皆通じた。（岡田、他二本大同小異）

禪師より論語の講義を聞いたことは、その註が何であつたかを問はず、心性的傾向

を培ふことゝなつたでもあらう。書道といひ、論語といひ、僧侶に就いた事は近世初期に於ける文教が社寺より俗間へ轉ずることを物語るものでもある。夢寐の間、人ありて教ふる所あるが如くにして曉得する事多しといふあたり、彼が文字の上は兎に角、心解を重視したであらうことを思はせられると共に、獨學者の達し得る自己教育の極致を物語つてゐるやうにも思ふ。僅少の書物を精讀して讀書力を養ひ得た自學自習の態度は後の徂徠等にも等しく現はれてゐるがこゝに彼の學問の堅實なる歩武が固められたのである。

但し仁齋の如きは十六歳に於て、既に第一次宋學超越期に達したのであるが、藤樹には朱子なるものに對する、かゝる批判は未だ現はれなかつた。又仁齋が「少時甚好學忘寢食、廢百事唯學之耽」とあるのに比較しても、藤樹學は學問として、少くとも文獻學的に、發達すべきではなく、道德的に、宗教的に従つて又精神教育的にその特色を發揮すべき境遇におかれてあつた。「學問としては取るに足らないが、實踐道德學として空前の發達を遂げた」(本田成之氏、明學概論、高瀬博士還曆記念支那學論叢所收)とさへいはれる明學が、彼に繼承され、消化され、發展させられる契機もあるではないか。淵岡山の學派に於ける藤樹學は、確にこの性質を明示してゐる。

論講を聞くに潜かに、往き、四書大全を研究するに、人の誹謗を憚つて夜を待つたころに、時代の闇黒に伴ふ先覺者の惱みを見得ると共に、時代と土地との關係もあらうが、當年の藤樹に比しては仁齋の方が年齢に於て遙に早く學究的、批判的立場に入つたといはなくてはならない。換言すれば十七歳に於ては未だ研學に對して充分の自任と自信とが出来てゐなかつたといふべきである。

然るに十九歳の頃は既に郡奉行に拔擢されてゐたし（寅九月十三日附古文書、全五、二二九頁）當時、公事訴訟に當つて、其の辭を飾り言を巧にして、兼て覺悟してゐても、與右衛門様に顔を合せ候と虚言は不被申」と百姓共を心服させてゐたらしい（永世録高―但し本書は現存するか否か不明、一全五、一三〇頁）。し、寛永四年には始めて中川貞良の輩が學に志し、同志二三輩藤樹のもとに會合した。藤樹爲めに大學を講明し、聖學を以て己が任とし、祖父を祭るにも儒法を以てし、自らも専ら朱學を學んで格套を以て受用した。（岡田、會津本には、中川貞良及同志三四輩茲先生來とある）。日本教育史上特筆大書さるべき藤樹の教育的活動が茲に開始されたのを注意すべく、大洲の地が始めて文教の雨露に浴し文學輕侮の風を化して、向學の氣風を馴致した點も見るべきであるが、藤樹に於ける心學思想の發展を考へる場合に最も注目すべきは、教育家になつたと共に、聖學に對する自覺の強くなつ

たことである。十七歳頃の態度に比較すれば如何に自任自信の念の強くなつたかを知ることが出来るであらう。

教育的活動はやがて著述的活動となつて、廣く且つ長く其の影響を後世にまでも傳へることとなる。それと共に自己の思想並に研究をその機會に清算し得る點に於て、やがては辯證法的にその思想が展開することとなる。寛永五年二十一歳の初學同志の爲めに著ぼした「大學啓蒙」は藤樹學史上かうした意味をもつてゐる。其の書専ら四書大全に従ひ、後之を見て未だ精しからずとして之を破つた(岡田・會津)といふからその内容の大略は察知することが出来る。

二十二歳の春、兒玉氏を訪ひ、荒木氏によつて「孔子殿キタリ給フ」といふ冷嘲に會ひ、怫然として發したる彼の訓戒は次の如き圭角の鋭いものであつた。

孔子ハ已ニ二千年前ニ卒シ玉フ。今我ヲ以テ孔子トスルハ汝酒ニ酔ハズンバ汝目盲タルナラン。思フニ我ヲ以テ孔子トスルハ文學アルヲ以テカ。文ヲ學ブハ士ノ道也。汝ガゴトキノ文盲ナルハ是奴僕ナリ。(岡田)

聖學の教育家たる自覺は既に二十歳にして確立してゐたが、二十二歳にしては斯くまで強く現はれるに至つた。文教の暗黒時代に弟子を集め、著述をして聖人の道

を廣め且つ自ら聖人の道を實行し、殊に朱子學的な格套に捉はれてゐたのだから、時人の眼には異様に映つたに相違ない。彼の生存した社會に於ける彼は實に早くから、常に思索の尖端に立つて、時代の闇黒を突破してゐたのである。此の點に於て主觀的には日本思想史上、客觀的に見ても地方思想史上、だけでは藤樹の占むべき時代は早くから始つてゐたと見なくてはならない。

併し聖人の道を以て時代を率ゐてゐたものは、それより以前にも藤原惺窩や林羅山によつて代表される朱子學の一派——必ずしも後世ほど嚴重な學派意識を固守してはゐない——が嚴存してゐた。否藤樹が當年信奉してゐた朱子學の如きも亦彼等の唱道によつて廣まりつゝあつたのだし、藤樹も間接に永くその影響を受けてゐた。(註)尤も羅山の信奉する朱子學と、個性的に心學的な藤樹のそれとの間に、聖人の道としての醇不醇の差は少からぬものであつたであらう。併しそれにしても表面に立つて藤樹學が羅山學にとつて代るといふ程にはなつてゐなかつた。藤樹學が表面に立つて羅山學に宣戰を布告したのは實にその二十三歳及び二十四歳の事である。彼自身の心理的過程からいへば二十三歳及び二十四歳の反林氏論は、以前からの延長に過ぎないが、客觀的にはこゝから藤樹學が歴史的地位を獲得したといふ意

味に於て一時期を劃するものと見てもよい。又積極的に大家を對手として、之丈の事を爲したとすればそれが彼の心的過程にもつた大いなる意味も亦考へられねばならぬ。

註 道統傳の如きも羅山の文集中に見ゆるものを藤樹が謹書して三十二三歳の頃猶且つ禮拜してゐた。(全五、六八頁) 三十三四歳の頃の翁問答に見えたる「本朝は后稷之裔なりといへる説、まことに意義あることなり」(全三、二四八頁)といふのも主として林家の成説に據り、且つ之に賛同したものであらう。

研鑽息むことなき藤樹にとつては、いつとて修學期ならざるはないのであるが、二十三歳から三十三歳までを、朱子學的藤樹學の建設時代としての歴史的意義によつて、章を改めて考察せねばならぬ。この時代の史的意義は從來考へられたよりも遙に重大であることを特に主張したいと思ふ。

第二章 前期藤樹學(朱子學的藤樹學)

第一節 林家の朱子學に對する純化運動

寛永七年庚午二十三歳の春大洲に在つて安昌弒玄同論を著した。弒逆の原因を明記した文獻として根本史料たるの價値をもち、藤樹が力をこめたものとして、こゝに當年の彼が學力と修養とを計算することも出来る。併し更に重要な意義は、彼

の醇儒觀を提げて、一世に時めく林氏のそれを駁したところにある。即ち二十四歳の林氏剃髮受位辨と共に、林氏の不純なる朱子學に反對したところに思想史的意義がある。曰く、

其論安昌之罪、則可也、論玄同、則不可也、其謂玄同稱醇儒也、是則左門不智之甚者也
(全一、二八頁) 夫玄同之爲人也、徒事於博物洽聞、以徇外誇多爲務、而不覈表裏眞妄之
 實然是以識愈、多、而心愈、窒、故說儒飾口、既罔大學之明法、效佛剃髮、以侮孝經之聖
 謨、以陷溺形氣之私、而戕賊性命之正、是則非人面獸心之俗、而何也、而謂之醇儒者、妄
 人之私言也、(全一、一二二頁)

と。左門は林羅山の長子、叔勝字は敬吉の事である。藤樹は後人に語つて「當時吾圭角未渾化、故作論辨之」(全一、一七頁)と後悔したらしいが、前述の十七歳を考へ合すれば、この圭角こそは二十歳以來著しく進展し來つた聖學に對する自信と自任とを示すものでもある。實に圭角の強さと、渾化の過程とは、共に藤樹學の進路を物語るもの、彼の修養は年と共に、特に三十四五歳以後勝心を避ける方向へ進んだから、後年は之を後悔するに至つたのである。

林氏剃髮受位辨はこの年、林羅山が弟の永喜と共に儒官に非ざる法印の位を授け

られたので、詩並に序を作つて之を解説したのを、翌二十四歳の春辨駁したものである。林道春記性穎敏にして、博物洽聞、儒者の道を説いて徒に其の口を飾り佛氏の法に倣つて妄りに其の髪を剃り、安宅を曠しうして居らず、正路を捨て、由らず、朱子の所謂能く言ふの鸚鵡である。而も自ら眞儒と稱し、世人も亦之を推して倭國の儒宗と爲し、其の言を信じ其の行を倣ふ者が多い。道春之に居て疑はず、施々として其の門人に驕り、出で、江戸に仕へ、其の形の沙門に類するを以て己巳の除夕、之に賜ふに沙門の位を以てした。林氏兄弟なる者之を受けて榮幸となし、世の毀笑を慮るや、文を作り、其の非を飾つて其の惡をなした。聽く者懵然として察せず、同然として之に従ひ、世を擧げて、儒道の道彼が如くなるのみとなして、明德親民の實學あるを知らない。後の人、實學を聞かんと欲するも其れ孰れに従つて之を聽かん。實に正路の蕪にして聖門の蔽塞、其の害異端よりも甚しい者がある。故に己むを得ずして其の言を擧げて、辨をなしたといふのである。こゝには、

林氏之剃髮、非佛者、則假形之徒也、非從國俗也、不言而可知矣、……道春葬其子、不用浮屠、則非不知流俗之不可從、佛氏之可攘斥、只不能舉斯心加諸彼而已、義足以葬其子、而功不至其身者、獨何與、私欲害之也、……今肖佛者之形、居佛者之位、服佛者

之服者謂如之何、佛者而已矣（全一、二三四—七頁）

といふやうに、孟子の攻撃的な句調を襲用して氣焰萬丈當るべからざるところがある。當年の藤樹には實に斯くの如き猛烈な闘志が燃えてゐたのである。之も亦、氣鋭言厲、頗似深文、攷先生年譜原稿、盡抹去叙作此及前篇二條似不欲言者、則豈得非先生晚年、亦自不滿、而門人隨承其意故耶（全一、二三頁）とあるやうに、後年後悔したらしいものであるが、後年藤樹が言ふを欲しなかつたことは、既に彼の教學が大成した後の事であり、性格の圓熟した頃のことであるからだ。従つて藤樹並に彼の門人等はこの辨の史的意義を意識し得なかつたに相違ないが、吾人は客觀的にもつたその大きな意義を看過することは出来ない。薩摩藩士伊地知季安の漢學紀源には儒俗第三十に於て儒者の剃髮を次の如く歴史的に考察して林道春にも言及してゐる。

宋僧以來孔釋並傳者、凡三百餘年矣、由是本邦之稱儒者而崇宋說者、後皆沿襲陽禿其顛、擬軀於僧、陰揭乘彝講道於儒、遂爲故事、其本蓋起乎皆隱釋而避博士家忌諱也、已而迨文敏林先生以斯學大振名於神祖創業之時、亦猶因循、至賜之僧官、始爲法官、及他諸儒、亦列制外暨闔齋、出著剃髮辨、始駁世儒、聞世儒言、雖曰從俗各飾之辭、實變於夷、而亂吾俗、皆出亂無稽云、後稍省悔、

迄元祿四年、法印孫正猷林先生名信篤 號鳳岡新承鈞旨、還生其髮、由法印官爲大學頭、國朝儒者、始革其遺俗矣。(卷三)

こゝに闇齋出づるに及び剃髮辨を著して始めて世儒を駁したと見えてゐるけれども、藤樹は之に先つこと實に二十年、既にこの二論文を發表してゐたのであり、その論調も亦遙に鋭いものであつた。(註)

藤樹といひ闇齋といひ、朱子學の圈内にあつて、林家の不純な、佛敎的な殘存をさへ含んだ朱子學に反抗して行つたもので、こゝに吾人は朱子學純化の過程を捉へることが出来る。(この論文から三十三年後に現はれた仁齋の儒醫辨は儒學の不純に對抗した點では同じ流の發展であつた。―古學先生文集卷之三、一丁)而も近世に於ける朱子學の本流は、寧ろ之を闇齋等に譲つて、(林氏學及び崎門學の發展とその史的意義)に就いては後日まきめて見たいと思ふ。)後期藤樹學は、朱學純化の前期藤樹學の畑から進んで、心學的方向特に陽明學的への發展となつた。之が伯繼岡山等への影響を齎し、日本陽明學の潮流を起すことゝなつたのである。

註 これから約十年を経過した頃執筆されたと推定されてゐる慶安二年本の翁問答に於ても、記誦詞章の學問の説明として「世間にはやる、物よみ坊主衆の、なしへらるゝ學問のこゝにて候(全三、一〇七頁)といひ、一五九頁では二年本にも三年本にも共

通に「世俗のさりさに學問は物よみ坊主衆、あるひは出家などのわざとして云々」といひ、二五二頁でも共通に、「今時の物よみ坊主衆のかみをそりて、出家のまねをめさるゝも道理にかなひたることに候や」との體充の質問に對して「定て日本にての俗儒はかみをそらではかなはぬ子細ありての事ならんか。……泰伯の孝徳もなく中庸にかなふべき義理もなく、かみをそりて我剃髪は泰伯の斷髪をななじこまなりなごいへる人あり。これは舟に刻て劍をもさむるの愚痴にあらずば、烏を鷺と云まどはず倭人なるべし云々」と師翁をして答へさせてゐる。(旁點筆者)

第二節 獨特の母子關係に基く孝道哲學の成立過程

九歳にして兩親の膝下を去つて祖父母に養はれ、十二歳に至つて父母祖父母の恩を感じた藤樹は、十四歳祖母を失ひ、十五歳祖父に死別し、剩へ十八歳の正月には父の訃音にさへ接した。爾來母を懷ふの情切にして、二十二歳一度暇を請ひて母を江西に歸省したが、二十五歳の春には母を豫陽に伴ひ歸り定省の孝を盡さんと欲し、重ねて江州に歸省したが、其の意を果し得なかつた。二十七歳上佃某に

此地へつれこし可申と存奉り、去々年御ことはり申上むかひに參候處、最早年罷寄又ハ病者に御座候而、里の内をも自由ニありき申事不罷成體ニ御座候、其上女の儀ニ御座候へバ故郷を離れ遠國へ參候こと假令餓死仕候而も成申間敷旨申候故、不及是非すて置罷歸候(全二、四八〇頁)

とあるのがこれである。而もこの母は十年以來獨住をしてをるものであり、藤樹の

外に別にはごくみ申すべき子もなく、又はさすがに頼るべきほどのよき親類もなく、四五年以前から漸く饑寒に及ぶ體であつた。(同前)この地におかれた藤樹が彼の榮職をすて、孝道へ走つたことは彼としては寧ろ當然ではないか。特に彼が病(哮喘)を得て淋しかつたことも加へて考へらるべきだ。かうなつて來ては彼の學問も亦眞劍だ。單なる論理的遊戯ではすまされない。こゝに熱烈な孝心の涌き出たのは當然すぎることだ。かゝる熱烈なる孝心の涌き起る機會は一般人には餘り多くは恵まれてゐない。例へば藤樹より十九歳の後輩に當る伊藤仁齋の如きも天性至孝であり、彼の母はその臨終に於て、合掌作禮、仁齋が孝養の篤きを感謝した(先府君古學先生行狀)ほどであるが、親子平和に同居してゐたゞけに、かうした痛切な感じは起り得なかつた。藤樹のこの境遇に藤樹獨得なものをもち得た一の大きな原因がある。心學的に發展したものは宋明の哲學に其の例が乏しくない。併し彼の心學が特に孝行哲學としてあれまでに大成したことは他に類例の無いところであらう。

同じ上佃某に、二三年前から自身病氣になつて次第に人並の御奉公をつとめ難くなつたことを述べた上で

私義ハ養親共に四人迄御座候へ共、三人にハ幼少ニ而はなれ申、今母一人残り申

候、母一人子一人の事に御座候、其上母存生之内も今八九年の體に御座候條、御暇申請故郷へ罷歸母存命の間、如何様のわざを成共仕養申し、母相果候は、……

…(全二、四八〇頁)

といつて彼の決心のほどを示してゐる。(註)

註 尤もかうした事實から簡單に藤樹が國君を棄てて母を歸養した點に就いて説をなすものもあるが、當時の史的事實として諸士が利祿の爲めに國替へをする者のあつたことは、同じ書に「眞實ハ身上なもかせぎ可申望にて申上かき御推量被成候事も御座候はんご云々」(四八一頁)とあるのでも窺はれるところで、その中に在つて藤樹は「母相果候はゞ罷歸貴様を頼存めしかへされ被下候はゞ御奉公仕度覺管に御座候、此外聊存子細も無御座候」(四八〇頁)とさへいつてゐるのであるから、平和な當代に於て異常な状態にある母の爲めに止むを得ず君を棄てたといふだけであつて、それ以上の何物でもない。

かくの如く致仕を求めながら容易に聽許されることもなく遂に寛永十年癸酉二十六歳の正月を迎へた。

癸酉之元旦、參神事畢、而獨坐有郷思、屈指羈旅既十有八年于此矣、偶然憶得臯魚之事、而讀其傳、至樹欲靜而風不止、子欲養而親不待、而三復之、而悔悟昨非焉、於是賦曹鄙之一絕、以聊言志、枉非費精神於無用、所謂不得其平則鳴者也。

羈旅逢春遠耐哀、 縉蠻黃鳥止斯梅、

樹欲靜兮風不止、 來者可追歸去來、(全一、八一—二頁)

異郷で成長したことを、而も遠國に母一人をおいてゐたことは、何人をしても親を懷はしむるに足らう。況んや、特に早くから親の恩を觀念し且つ孝經を重視して之を以て子弟を導いてゐた藤樹をして内省の深刻をもたらしめたのも亦た尤もではないか。

二十七歳家老佃氏に疏を捧げて致仕を乞へども、猶未だ許されず、遂に已むことを得ず、冬十月強ひて仕を致して歸東した。唯逃亡の罪を恐れて京都の故友の家に寓して命を待つこと百餘日(尤もその間に歸省もしたであらう。)其の尤めなきを以て初めて江陽に歸つた。こゝに多年の惱みは一の解決を得たのである。(出奔に際して、是の年の祿米を盡く倉に積み置き、朋友に假貸するの米穀をば器物を遺して之を償ひ、江陽に到るや大洲より従ひ來れる老僕に三百文の澁底より二百文を與へたさいふ年譜の逸話は、當年に於ける彼が徳さその感化さを語つてゐる。)

二十八歳乙亥之歲旦遊宦在於他邦有年于此矣、歸逢鄉黨乙亥之春、而和樂且耽タシシム以足知羈旅十有九年之非と稱して、

鄉黨元旦會九族 和氣油然相親睦

昔日雖知非眞知 舟可行水車則陸(全一、八二頁)

と歌つたところに、藤樹學史上に於ける歸省の意味を知ることが出来る。從來の知

は眞知ではなかつた。歸省しなければ眞知は得られなかつたのだ。格套（法式—眞蹟熟語解全三、五八九頁）で辛うじて満足してゐた修養は附焼及である。親子の關係彼の如きものが、地位をすて知行をすてて歸省したことによつて和氣油然相親睦を體驗したとき、昔日の知の眞知に非るを自覺したのも無理はないが、こゝに彼の人生觀や修養の境地が一大飛躍をなしたのを注意すべきである。

同年の夏、洛友に寄せて「おもひきや、天津めぐみのたのしみを告むかたなく身にひとりとは」〔全三、二九六頁〕と歌つたのも這般の消息を示すものであるが、わけても岡田氏本年譜二十八歳の條に、

先生嘗曰、予豫州ヨリ歸テ后少シノ間暇アレバ眠リ臥テヨク寢ル一年餘、此頃年、心常ニ人間世ニ放在メ精神ヲ播弄スルガ故ナリ。豫州ニ在シトキ夜ル寢テ後人ノ呼ブト一聲ニメ醒メ或ハ梵音ヲ聞テモ覺ム。故ニ以爲ヘラク心明ニメホトンド寢テ不尸者ニ近シト、今コレヲ思フニ支撐（筆者曰く、眞蹟熟語解によれば力をつけ念をおこして守ること）矜持（意あつて法を守つて至善にとどまらざること—熟語解）ニ拘羈（意念によつて名利格法に滞りなづむこと—熟語解）スルガ故ナリ（川田本には「吾歸往小川邑一年於此始覺此心稍安然、故寢則背貼席矣」とある。）

とあるのは特に注意さるべきである。實に十八歳の正月、父を失つてから、尙貧乏な母を一人遠國にすておいたことは至孝な彼として、ひどい心痛であつたに相違ない。この無理を通して、修養を續けた十年間が惡戰苦闘であつたらうことを察し得ると共に、惡戰苦闘そのものが後日への發展の基礎をなし根柢をなしたことをも考へねばならぬ。併し單にそれだけで安心の地位に達し得ないのも無理はない。こゝに歸省の必要がありその意味がある。

母の爲めに、地位をすて、歸省し、刀を賣つて母子の生計を立つるところに、――岡山先生示教録に「先師曾ての玉く、彼事（良知）を知てからは侍の望も知行の望もなきこと也と仰せられき。先師は御見得なされての御事ならん」（全二、五九七頁）といつてゐるのを見れば二十七八歳の頃地位をすてるとは相當の痛事であつたに相違ない――一種の深い意味があるとも考へられる。少くともこゝに彼の教學の孝道的な、實踐的な個性の一面を見ることが出来る。斯くの如き特殊の體驗の後に於て或は孝經に觸發したり、愈、味の深長なるを覺えたり、或は首經考、孝經考、孝經啓蒙翁問答等孝道中心の著述となつたり、或は孝經の講會、拜誦等となつて、學問的にも、宗教的にも教育的にも藤樹の教學を形成する重要なる要素となつたことは寧ろ當然の過程であらう。

卑近な孝を以て深遠な哲理を説いたとして、そこに藤樹の教育史的意義を見出さんとするよりも寧ろ逆に卑近な孝を深化して高遠な哲理を建設したところに私は藤樹學の偉大なる歴史的意義を求めたいと思ふ。

第三節 大野了佐の教育

教育家としての藤樹を傳へる爲めに重大な役割を演じた大野了佐が、江陽に來つて重ねて藤樹の感化教導を仰いだのは、藤樹卅一歳のことである。了佐は周ねく知られてゐる如く、稟質極めて愚魯鈍昧にして、士業を繼ぐに足らず、父の賤業を營ましめんとするを憂へて、藤樹に請うて醫書の句讀を學ばんとした。藤樹その志を憫んで大成論を授くるに、先づ二三句を教ふること二百遍ばかり、已より申に及んで漸く記憶するも、食後之を讀むに皆忘れ了る。又來つて之を習ふこと百餘遍にして始めて記得した（年譜三本とも大同小異）と傳へられてゐる。

而も日に來つて習ふこと年を経、藤樹の歸省後も、今年來つて醫を學んだ。藤樹その醫術を曉得しがたきを以て醫筌を作つて之に授け、又之を講じて其の義に通せしめた。後終に醫を以て世を渡り數口を養ふを得た。（川田本は遂以醫成家とし、會津本は以醫鳴世者也と誇大してゐる。）

藤樹先生全集中遺著の四分の一を占むる第四冊醫書の主なるものはいふまでもなく捷徑醫筌であるが、その捷徑といひ、醫筌と稱する啓蒙的教育的なものが、了佐の教育を機縁に編述されたことは、「庸醫を養成するため、其精力を竭くす所に能く百世の師となり、萬人を動かす所以があるとも思はれる」(註)事と共に、教育史上に占むる了佐の意義の大いなるを思はしめる。

藤樹は曾て門弟に向つて、

吾於了佐、竭吾精力了矣、然非彼勉勵之功、吾亦未如之何也、二三子天資非了佐之比、

苟有志焉、何患不成、特缺一勉字耳、(川田氏本年講、旁點筆者以下準之)

と語つたといふが、了佐ほどの愚魯鈍根も本人の志と勉に加ふるに教師の精力を竭し了る底の努力を以てすれば、教育的効果は必ずかち得らるべきものだといふ教育力に對する確信を體驗によつて與へられたことは、了佐の齎らした最大の貢獻であらう。

了佐の教育に成功したといふ貴い體驗から、彼が低能者教育に對する特殊の方法を發見せずして、却つて一般教育の根本原理を捉へ得たことも注意すべきことで、藤樹自身も志と勉とを以て後年悟道に入つたが、その頃の書簡に現はれたる教育的態

度の要旨も亦「志」に切に候へば何の手間もいらすとり入なる御事に候（金二、五二八頁）といふ種類のものであつた。自己を教育し門人を教育する藤樹學最大の祕訣としての切なる志と勉が了佐のそれに負ふところ多きと共に、この實例を以て教訓された諸生への影響と、この話が後世に及ぼした刺戟とも亦注目すべきものであらう。彼が「學」と題して「切磋無間斷、下愚得大知、克積百倍功、不肖躋聖地、況中人之資、奚爲暴棄安」（金一、二三八頁）と歌つたのも上述の信念に基づいたものであらう。

吾人は藤樹學史上最も重要な門人三人を算へることが出来る。第一はいふまでもなく、藤樹學をその歿後に於て理論的に展開させ政治的に實現させた英雄熊澤伯繼であり、第二は大成期の藤樹學とその人格的感化とを受けて、之を忠實に後世へ傳へんとした温厚なる君子人淵岡山であり、第三は藤樹を玉成させる重大な要素となつた愚魯鈍味の大野了佐である。沙門道元や伊藤東涯の如く、偉大な教師から直接人格的感化を受け得なかつた我が中江藤樹は彼の境遇や彼の門弟等を契機としてかくの如く修養を積んだのである。そこに却て彼の獨創性を遺憾なく發揮し得たことは、父仁齋によつて既に決定されてゐた坦々たる古義學の大道を歩むべき家學的地位と、しかすべく最も適當なる孝子としての性格とを持つてゐた」（拙稿、伊藤東涯に

於ける仁齋學の發展、三宅博士古稀祝賀記念論文集所收）東涯の一生を通じて深刻な昨非的反省の現はれなかつたことや、歿後紹述先生と謚せられたこと、比較することによつて容易に理解されるであらう。

さはれ斯くの如き愚鈍なる了佐の爲めに漢文を以て醫筌を作つて與へたことは、了佐の天分を幾分割引して考へねばならぬものかも知れず、吾が精力を竭すほどの教育にかな書の著書を以てしなかつたが如きは、晩年の書簡や著述の多くがかな書を主としてゐるのに比較して、藤樹の教育的手腕の未だ圓熟せざるを示すものでもあらう。

註 西博士、中江藤樹、世界思潮第四冊、二六八頁（初版）。

醫筌の著は藤樹の醫學に對する深き造詣をも語るもので——勿論この造詣は醫筌を編纂する爲めに主として養ひ得たものであらう——三十六歳では山田氏森村氏の爲めに小醫南針を、三十七歳春には右兩氏の爲めに神方奇術を撰述してをり、三十二歳の三月には、山田權が豫州から來て醫を學び、三十九歳の春には仲條太來つて醫を學んだことが年譜に現はれてゐる。醫者が儒者に就いて儒學を學ぶことは徳川期を通じて一般に行はれたもので敢て珍とするに足らないが、儒者たる藤樹に就いて

醫學そのものを修め、剩へ醫學成書の大著を藤樹の手によつて得たるは注目すべきものである。

第四節 藤樹規及び學舎座右戒

寛永十六年己卯春四月、藤樹規並に學舎座右戒を作つて諸生に示す。藤樹時に年三十二、

原竊惟、今之人爲學者、惟記誦詞章而已、是以吾道之所寄、不越乎言語文字之間、愚嘗憂之也、深故推本聖人立教之宗旨、而參以白鹿洞規、條列如右、而揭之楣間、庶幾與一二同志、固守力行之也、(全一、一三四—三五頁。)

當代一般の學風たる文字言語の間を超越し、聖人立教の宗旨を推本し、之に參ふるに白鹿洞書院揭示を以てしたもの、三十二歳までに發展し來つた藤樹學の面影を明かに示してゐる。朱子學の圏外に出てはゐないが、大學の三綱領を加へて五教に統一あらしめ、畏天命、尊徳性を加へて持敬の要、進修の基本としたあたり、白鹿洞規に満足し得ぬ彼の教育的獨創性を窺ふべく、思想的に、朱子學より陽明學的への傾きを暗示してゐるものではないか。

而も白鹿洞規の爲めに明德を補はんとしたのは、こゝに初まつたのではなくて、既

に二十八歳の秋洛友來つて益を請ふの次、白鹿洞規を筆して示諭したが、楮國に餘地があつたので一絶を作つて其の端に書いたといふところ(全一、八三頁)に現はれてをり、天命を畏れ徳性を尊ぶの持敬用力の方たるを證したり、持敬の要旨が、畏天命尊徳性の義と相表裏することを主張したのは既に三十一歳の持敬圖說(全一、七〇五頁)に見えてゐる。

藤樹規が特に單なる藤樹一人の修養訓に非ずして學園の楯間に掲げて諸生と共に固守力行せんとした學規であることは藤樹塾の要求を物語るものであり、藤樹塾を代表として進み來つた日本教育史の一面を示すものでもある。併しこの學規がいつ頃まで利用されたであらうかも亦教育史の問題であらう。白鹿洞規が最も大きな弊害を繼承したと見るべきは、その複雑多岐にして、實行力の鈍かるべき一點である。藤樹學が煩瑣な朱子學的格套を脱して、致良知の學脈に没入した時、藤樹規も亦致良知の三字を以て置き換へられたことは想像に難くない。併し享保十四己酉年六月廿八日、行年六十六の中村伯常が孝經講釋聞書の卷末に

唯、日、唱、言、忠、信、行、篤、敬、懲、忿、窒、欲、遷、善、改、過、二、語、而、尊、信、耳(全二、二四二頁)

と記してゐるのを見れば當代までどれだけかの力があつたのかも知れぬ。

藤樹が一夕小川村の近隣ユルギ萬木村同志の招に應じて出講したことがある。門人五六輩も従つて行つたが此の里人の斯學尊信者を得べき好機會であるから、必ずや華々しい講説があらうと門人共は窃に期待して居つた。然るに更にその事もなく、只常の如く大學三綱領を講義しただけであつたといふこと、並に藤樹の天命を畏れる事は恰も無學の老人の如くであつたといふことは岡山先生書簡に見えてゐる。これらの話は三十二歳の白鹿洞規に添加した藤樹の宗教的信仰と獨創的見解とが、晩年に於ても藤樹學の本質を形成する重大な要素であつたことを示してゐる。

學舍座右戒第一條は「可明辨長幼之序、而篤行惠順之義也」を説き、第二條は

同志之交際、可以恭敬爲主、以和睦行之、一毫不可自擇便利、モウマ狼毋求勝、不可淫媿戲慢

評論女色、不可動作無儀、不可里巷之歌謠、俚近之語、出諸口、宜德業相勸、過失相規、(全

一、一三六頁)

といふ懇切なものである。當時門人格套に落在して同志の際すら融通しなかつたことは岡田氏本年譜に窺はれる程であるから、恭敬和睦の徳を以て本條の冒頭においたのも機宜に適した教育方法である。

第三條は最も多く藤樹學の個性のあらはれたもので、

毎日清晨拜誦孝經、可以養平旦之氣、而后或受讀、或受講、或溫習、或謄寫、不可一時放慢、晚炊后、可以遊於藝、若及志倦、体疲、則可少逍遙自適、(全一、一三七頁)

といふのである。岡田氏本年譜三十三歳の條に「夏孝經ヲ讀デ愈味深長ナルヲ覺フコレヨリ毎朝拜誦ス」とあるけれども、三十二歳にして既に、毎日清晨孝經を拜誦してゐたのであつて、明人江元祚の誦經威儀に暗示されたもの、集義和書によれば、心法の受用になるべきものはまづ取つて助けとしたのであるといふ。全二、二四三頁に載せられたる假名書き孝經は右の誦經威儀と孝經本文と並に藤樹の跋文とを假名書きにしたもので藤樹の眞蹟と推定されてゐる。孝經の拜誦を以て孟子平旦之氣の養成に利用したところも注意すべきであるが謄寫を重視したことは現に孝弟論(全一、三九一七六頁)等藤樹自身の實行を物語つてゐる。

第五節 朱子學圈内に於ける動搖

廿八歳周易啓蒙を得て之を讀み、日夜尋究、遂に其の蘊を窮めた。岡田氏本年譜によれば、我れ易の理に於ては心を盡さば或はその萬一を得ん。筮著に於ては其の傳を得ずんば能くせじと考へて、京師に行つて易の講師を求めて一人を得たが、銀數枚の聽講料を要求されて、清貧なる身の意に任せず、更に一人を得たが、講了まで外出を

とめられて、遂に果さず、是に於て易書を求むるに始めて啓蒙を得たので、江陽に歸つて後、此を熟讀算考して其の筮儀に通じたといふ。(會津本では二十七歳の條に見え、川田本では二十八歳の條に十數字を以て略記してゐる。)

翌二十九歳の秋京に行き、始めて島川子に逢ひ、是に於て易を談論し、月を閲して歸ると年譜に見えてゐるが、全集にその時の送行詩を掲げてゐる。(池田とせず藤田とし、丙子の秋でなくて夏になつてゐる。)

心友相逢堪弄丸、波瀾雖起點無瀾

父慈子孝畫前易、須向韋編絕處看(全一、八四頁)

藤樹先生眞蹟熟語解によれば、丸は大極の異名至善の事で、弄とは、至善に止る工夫游泳明快にして他念なく滞りなきの謂(全、三五九二頁)である。王學との關係に就いて曾て問題となつた(全五、五四頁並に全一、七八頁)二十九歳丙子鶏旦の

格致誠脩貴日新、易難先后不彬彬

料知聖學成功地、氣朔今朝共是春(全一、八三頁)

の如きも右を背景として理解することが出来るであらう。

寛永十四年丁丑、三十歳にして高橋氏の女を娶る。當時未だ格法に泥むが故に、三

十而有室の法を執つたと何れの年譜にも記されてゐる。朱子學的格套は廿七歳以前に比較すれば幾分自由になつてゐた筈であるが、尙未だ斯くの如きものがあつた。爾後漸次動搖して遂に卅四歳意識的に格套を守るの非を主張するに至つたのである。

夫人高橋氏、容貌甚だ醜しと雖も、性質頗る聰明にして心を用ゐること貞しく、藤樹常に諸門人を會して夜半に過ぎ、或は五更(午前四時)に及んで後閨に入れども、十年の間終に先んじて寝ねず、居常小事といへどもその命を受けざれば行はず。會津本年譜には「嗚呼、賢貴貞婦者也」と評してゐる。外形よりも精神を重んじ、格套を棄て、致良知に沈潜し、風俗を氣の毒に思召候由、入ざる御指出事にて候(三十九歳、答清水子、全二、四二三頁)といつたやうな自反慎獨の方向へ進展すべき運命をもつた藤樹學の爲めに、醜にして貞なる夫人を得たことは注意せねばならぬ。之によつて藤樹學の發展を助長したといひ得ざる迄も、消極的に、妨げられなかつたことだけは、いひ得るであらう。特に十年の貞婦が一朝にして病歿し、藤樹の悟道に大いなる刺戟を與へたことは、吾人の筆を改めて論せんとするところである。

三十一歳の夏、持敬圖說並に原人を著した。從來専ら四書を讀んで堅く格法を守

り、専ら聖人の典要格式等を逐一に受持せんと欲したが、間、時に合はずして滯碍行ひがたきところあるに疑問をもち、遂に五經を取つて熟讀し、觸發感得あつてこの二篇を作爲し、以て同志に示したと岡田氏本年譜(他の二本も大同小異)に見えてゐる。その朱子學の圈内にあつたこはは、三皇二帝禹湯文武周公孔子顏曾思孟程朱惟人之師也(原人)として、程朱をあげながら、王陽明の名を加へてゐないことに見るべく、五經に入つてゐることは前記易學啓蒙の精讀と「易書詩春秋三禮四書孝經小學惟人之書也」(原人)とある記述を以て知り得る。

明德圖説も亦同時代の述作で藤樹學史上の意義も殆ど全く同一である。心の物たる出入時なく、其の郷を知ることが出来ない。故に其の理氣の辨善惡の原に於て初學の體認し難い者があるから、先天圖を祖述し、太極圖を憲章して心法を發明し、體認の餘に本づき、自得の妙を述べて初學徳に入るの一助たらんことを庶幾し明德持敬の二圖を作り且つ圖體の大義を釋したのである。(全一、六七六―七九頁)學者必ず明德圖を以て明德の本體心法の淵源を嘿識神會して、持敬圖を以て體認して、心法の工夫を服膺すれば其の差はざるに庶からんか(全一、六八二―三頁)といふのが藤樹自ら任ずるところである。

藤樹のこの圖を作るや、明德圖を以て變じて持敬圖となしてゐるが、持敬はもと明德を明にするの工夫にして、彼此の別がないと考へたからである。(全一、六七頁)圖説を用ゐて初學を導かんとする教育的態度と、明德持敬の兩圖を合一せんとする統合的態度とは、この時代の藤樹に屢、現はれて、或は四書の大旨の歸一するところあるを發明せる四書合一圖説となり、(全一、六三三―三五頁)或は仁義禮智信の五性を同一體の明德に歸せしめたる五性圖説となり、(全一、六四二―七四頁)或は朱子大學章句序に於て文の大段小段を區別し、以て文の綱目を明示せる大學朱子序圖説(全一、六三六―四二頁)となつた。こゝに吾人は讀書法、修養法、教授法等に於ける藤樹學當年の意味を認めることが出来る。最後に吾人が最も注意せざるべからざるは程朱に對する藤樹の獨創的態度である。持敬圖説によれば、程子主一無適の説は最も親切的當であるが、其の無適之謂一と曰ふときは、則ち一の義が親切でなく、立言太だ簡奥にして意味の足らないものがあるから、初學其の精蘊を曉ること能はずして、往々實を著け手を下すことの難きことを苦しむ。朱子と雖も儒佛惺々の辨に於ては、猶未だ瑩かならざるもの、即ち言を立つる太だ簡奥なるの弊があるとして、

此愚所以不能信其説、而取證於聖經賢傳、而別作圖説也……雖如不從其説、而實則

不有不同也、唯本末先後之異也已、宜熟玩（金一、六八七頁）

といつてゐる。こゝには明に程朱學の圈内にありながら、必ずしもそれに束縛されぬ當代の藤樹學が窺はれるではないか。

持敬圖說や原人は、當時工夫ノ要カクノゴトクナルニ過ギズトス（岡田氏本年譜三十七歳）と藤樹が述懐した如く、三十一歳當時の思想を代表するもので、その後間もない頃のことであらうが、送森村子によれば、この兩篇を講義してゐる程である。（金一、八八頁）然るに藤樹の工夫寢く積むに至つて、其の説の瑩かならざることを見覺するに至つた。更に詳言すれば、これを行ふこと數年にして漸くその行はれざるところ多くして、甚だ人情に悖り、物理に逆ふことを知つて、疑ひ止むことを得ざる（岡田氏本年譜三十一歳）に至つたのである。

三十二歳の秋、論語を講じその郷黨篇に至つて大いに感得觸發し、是に於て論語の解を作らんと欲し、その秋から著述を初めて、病中にも拘らず孜々として編纂の歩を進め、一年餘にして郷黨啓蒙翼傳を完成した。「郷黨の一篇は夫子徳光の影迹を畫き出して、后學聖心を求め得る所以の筌蹄を開示した」（金一、四〇五頁）もので、三十一歳の秋にも藤樹の下に來つた吉田子の爲めに、論語を講じてこの篇に及んでゐる。かくて

「二貫心法勿他求、郷黨全篇聖所裁」(全一、八七頁)とは送行詩の一節である。

啓蒙翼傳を通讀して第一に氣の付くのは、卷頭の心迹論である。彼は明德はもと無方無體、無聲無臭であつて、高明を極め、中庸によるの聖心を方策に布くことが出来ないから、唯影迹を描畫して、聖心を其の中に寓すると見、學者の宜しく至善を期して、其の迹に襲らず、聖心を得て師範と爲すべきを主張した。而もこの説き方は彼の獨創であつて、程子は郷黨は分明に一箇の聖人を畫き出すといひ、余應虬の四書翼經圖解には郷黨一篇は天然一幅の聖象だとしてゐるのみで、皆渾淪して説いて心迹の辨はなかつたが、藤樹は童稚の蒙を啓かんと欲して心迹を分別して説いた(全一、四〇七頁)のである。従つて彼は無言の端的を嚠識して之を吾が心に體認すべく、徒に景象に依倣して聖心の本眞を嚠識すること能はざることなき(全一、四〇八頁)を説き、或は皮膚の講を棄て、無言の骨髓を理會すべき(全一、四七四頁)を教へ、或は學者宜しく其の迹に因て其の心を求むべし(四七二頁)といつてゐる。この心迹論は王學期に入つて更に一段の發展を遂げる。

余の推測にして誤なくんば本書は藤樹の四十一年間に於て恐らくは最大の努力を傾倒したる力作なるべく、藤樹先生全集の編纂委員としても亦恐らくは最大の努

力を費したものであり、同時に最大の、少くとも最大に近き効果を擧げ得たるものであらう。書史學的には翼傳の外に啓蒙の現存せるを證明し得たること、並に藤樹の用ゐたる註疏本を考究して閩本たるべきを推定し得たるが如き、思想史的には藤樹の時中思想の深意を見出したるが如き即ちこれである。

本書は又當年の藤樹學に於ける經學的素養を清算し得る材料たる點に於て藤樹學發展史の研究に貢獻することが少くない。即ち本書の參考書目は十三經註疏本を初め、易經にありては朱子の本義、詩經書經にありては集傳、禮記にありては、陳澧の集說、四書にありては集註及び大全、四書蒙引、四書翼考、四書筋解圖考、四書翼經圖解、四書說叢、字書にありては說文、埤雅、六書精蘊、其の他諸子百家にありては老莊を始として、孔子家語、呂氏春秋、慰繚子、淮南子、論衡、武書大全、黃帝內經、靈樞本草、邵氏聞見錄、皇極經世書、朱子小學文、公家禮、主龍溪語錄、白虎通等（全一、三九一頁、主任委員解題）比較的廣汎な範圍に互つてゐて、藤樹學が當年に於てかなりな該博さをもつてゐた一面をも示してゐる。

而も、不時不食の節に集註が「時ならずとは五穀成らざるなり、果實未だ熟せざるの類なり」となせるを排して、時ならずとは、かゝる狹義のものにあらず、食ふべからざる

凡ての場合を意味する。即ち此の句の前後食はざるものゝ總てを此句にて代表せりとして「五穀成らざるの類は以て其の蘊を盡すに足らず」(全一、四四九頁)と指摘し、又「廐焚けたり、人を傷けしか、馬を問はず」の句に集註が「蓋し人を貴び畜を賤しむ」と解せるを斥けて以爲らく、人を貴び畜を賤しむとするは、只之れ皮膚の講のみ、先づ人を問ひ、未だ馬のことに及ばざりしに過ぎず、以て聖人先づ人類を愛し而して後動物に及ぼす心を見るべしとしたところ(全一、二五七―八頁解題、全一、四七四頁)から見ても、當時既に必ずしも朱子學にのみ捉はれてゐなかつたのを知ることが出来る。若し夫れ王龍溪語録をも引用せるが如きは、本書の完成が前期藤樹學の時代から後期藤樹學の時代にまで跨つてゐたことを示すもので、偶、以て朱子學圈内に於ける動搖とその最初の到達點とを示して餘りあるものであらう。

三十三歳にして性理會通を讀み發明して、毎月一日齋戒して太乙神を祭ることゝした。蓋し古天子は天を祭り、士庶人は天を祭るの禮なく、此の祭を以て事とした。是を以て之を祭つて怠らず。夏、太乙神經を撰ばんとして稿半ばに及んだが、病を以て終に書を成すに至らなかつた。(年譜)寛永十七年八月十三日の太上天尊大乙神經の自序に、

愚嘗拜靈像、而以爲易神之尊像、而儒者之所敬事者也、然宋儒排斥符章、而無他左驗、是此疑而不能決、三年于此矣、今讀唐氏禮元剩語、而豁然得證、悟靈像之眞、而喜不寐、命哉、於是會衆說、而析其衷、斟酌祭祀之儀節、而爲編、名曰大乙神經、與同志篤行、而庶幾不離尊神之左右云爾(全一、一三七頁)

とあるものは即ち之で、當年に於ける宗教的信念を見ると共に、三年前から宋儒を此の點に於て離脱すべき、少くとも朱學を批判すべき契機のあつたことを示してゐる。靈符疑解に於ても、宋儒鬼神の事に於て體認熟せず、たゞ時俗の蔽を矯めんと欲して徒に口を以て辨を取るのみ、而して明儒其の非を悟つて其の失を辨じたのは、大いに後學に裨益するものと見て、

故愚不從宋儒、而從明儒、加旃靈像全體易象、則亦奚疑乎哉、如先天圖、邵子以前、在方士之手、而見不爲我儒之用可觀(全一、一四六頁)

と云つて、明確に宋儒に反對する態度と、易經に據る根據と、先天圖に於ける先例とを示してゐる。

朱子學の圈内にありながら常にこれを超越せんとする藤樹學の本質的特性は、や

がて陽明學との接觸によつてその内觀的に深化する個性を遺憾なく發揮する。朱子學的藤樹學の史的意義を重視せんとする吾人は、同時に天才藤樹を通して朱子學より陽明學への展開を演ずる。我が邦の近世思想史並に近世教育史の歩みを、更に意味深く眺めねばならない。次章後期藤樹學は陽明學的藤樹學の成立と、その意義とを論究せんとするものである。(八月十七日稿、以下次號)